

びわこの 考湖学

22

「琵琶湖の大きな船」と聞くと、現在だと「ミシガン」「ピアンカ」や「うみのこ」の船名をあげることができません。少し年配の方ですと「玻璃丸」を思い浮かべられるでしょう。しかし約400年前、とてつもなく大きな船が琵琶湖に浮かんだことがあったのです。

「其時のために大船を拵へ、五千も三千も一度に推付け越さるべきの由候て、五月廿二日、佐和山へ御座を移され、多賀・山田山中の材木をとらせ、佐和山山麓松原へ勢利川通り引下し、國中鍛冶・番匠・杣を召し寄せ、御大工岡部又右衛門棟梁にて、舟の長さ三十間・横七間、櫓を百挺立てさせ、艦舳に矢威を上げ、丈夫に致すべきの旨仰聞かせられ、在佐和山なされ、

油断なく夜を日に継仕候間、程なく、七月五日出来訖。事も生便敷大船上下耳目を驚かす。案のごとく」
これは『信長公記』巻六に書かれていたものです。
元龜4(1573)年、織田信長は、室町幕府15代将軍足利義昭が反信長の戦備を整えているとの情報を得ました。そこで、当時の信長の拠点である佐和山(彦根市)から坂本(大津市)へ多量の兵員を一度に輸送するために、急遽巨大な船の建造にかかります。建造にあたっては、後に安土城天主建設の大工頭を務める、岡部又右衛門が棟梁

信長の巨大船上



信長の巨大船は琵琶湖汽船の遊覧船「ピアンカ」に匹敵する大きさだった

となり、信長自らが工事の指揮監督をしました。
大船は長さが約54呎、幅が約13呎と、現在琵琶湖に浮かぶ船の中で最も大きいミシガンやピアンカとほぼ同じ位の大きさなので、あまりにも大きな船が出現したことに人々は非常に驚いたことが、上の文献からわかります。
しかし、信長の肝いりで作られた大船も、完成直後の7

月6日に坂本まで使った後、同月26日の高島攻めに使われたきりで、その後は記録から消え、次に現れるのは約3年後の天正4(1576)年のことです。

「先年佐和山にて作置させられ候大船、一年公方さま様御謀叛の砌、一度御用に立てられ、此上は大船入らず、の由候て、猪飼野基介に仰付けられ取りほどき、早舟十艘に作りをかせられ」(『信長公記』巻九)

大船は解体されて、小さな船(早舟)10隻に作り替えられてしまった様子が記されています。ではなぜ大船は解体され、また、その後の琵琶湖の舟運に生かされることはなかったのでしょうか。その訳については、次回にお話ししましょう。

(滋賀県文化財保護協会 岩橋隆浩)

将軍に備え 54メートル「ピアンカ」級